

大学生のコミュニケーション・ツールとしての 携帯電話利用の分析

田 中 孝 志

An analysis of undergraduates' usage of the cellular phone as
their communication tool

Takashi Tanaka

問 題

携帯電話の普及が著しい。総務省（2004）によれば、平成16年6月末現在で加入者数が約8270万件に達しているという。しかも松田（1999）によれば、1998年12月末で加入者数が約4500万件であったのだから、5年半で3770万件の増加という急激な普及を見せている。しかも中村・吉田（2001）によれば、関東の世帯における携帯電話の普及率は66.3%であるのに対して、最も普及率の高い20代では男性が84.6%、女性が74.4%であった。つまり、携帯電話は、とくに若者に急激に普及しているメディアであるといえる。

普及率が高いということは、実際に携帯電話を利用することが多いということであり、相対的に、その影響も大きい可能性がある。たとえば、松田（1999）は、10代～20代の若者に対する聞き取り調査の結果として、30代以上の人の「移動体メディアをもつと束縛感がある」という意見に代わって、「持たないと寂しい、落ち着かない」という感想が得られたと報告している。また、以前なら電話するまでもないとされていた「ちょっとした」用件でも電話する傾向が見られるとも述べている。また、大学新入生の携帯メールの利用

が新入生の孤独感に及ぼす影響を調べた五十嵐・吉田（2003）は、入学後の友人へのメール送信数の増加が孤独感の低減に結びつくことを明らかにするとともに、携帯メールの親和充足機能を高く評価している者ほど入学後の4ヶ月の生活の中で入学前からの友人との携帯メールによる関係の重要度の認知を低下させる傾向があることを明らかにしている。これは、携帯電話の使用が青年の対人関係や感情などの心理的側面に影響を及ぼす可能性があることを示すものである。

そこで、本研究では、大学生を対象に、携帯電話の利用実態を調査するとともに、それがさまざまな心理的・行動的側面に及ぼす影響を検討することを目的に質問紙調査が行われた。

方 法

調査対象者 大学生157名（女性125名、男性31名、不明1名）が調査に参加した。年齢の内訳は、19歳71名（女性61名、男性10名）、20歳67名（女性54名、男性13名）、21歳11名（女性6名、男性5名）、22歳6名（女性3名、男性3名）、23歳1名（女性）、記載なし1名であった。学年は、2年生149名（女性120名、男性29名）、3年生1名（男性）、4年生6名（女性5名、男性1名）、記載なし1名であった。

材料 3部構成の質問紙が用いられた。Ⅰ部は、10項目から構成され、携帯電話の所有・維持の実態に関する質問からなっていた。Ⅱ部は、携帯電話の使用状況に関する質問26項目から構成されていた。Ⅰ部・Ⅱ部の質問項目は、質問Ⅰ-01において「現在、携帯電話またはPHSを使用している」と答えた回答者だけが回答する項目として用意されていた。一方、Ⅲ部は、7項目の質問からなっていたが、これは質問Ⅰ-01において「現在、携帯電話またはPHSを使用していない」と答えた回答者のための項目であった。内容は、携帯電話を使用しない理由、使用経験、代替手段の利用などに関するものであった。各質問項目の具体的な内容は以下のとおりであった。

携帯電話利用者向けの質問項目

- I-01: あなたは、現在、携帯電話または PHS を使っていますか。
- I-02: あなたは、自分用の携帯電話(PHS を含まない)を持っていますか。
- I-03: あなたは、自分用の PHS を持っていますか。
- I-04: あなたが最初に一台目の携帯電話/PHS を持つようになったのはどのくらい前ですか。
- I-05: あなたが現在所有している携帯電話/PHS は最初に持ったものから数えると何台目ですか。
- I-06: あなたが初めて携帯電話/PHS を持ちたいと思った最も大きな理由(動機)は何ですか。
- I-07: 携帯電話/PHS の料金は誰が支払っていますか。
- I-08: 1 ヶ月の携帯電話/PHS 料金はあなたが自由に使える金額の何%程度になりますか。
- I-09: あなたが現在使っている携帯電話/PHS を選択した理由は何ですか。
- I-10: あなたにとって携帯電話/PHS を持つことは必要と思いますか。
- II-01: あなたは自宅にいる時に携帯電話/PHS の電源を入れていますか。
- II-02: あなたは、外出する時には携帯電話/PHS の電源を入れますか。
- II-03: あなたは、携帯電話/PHS で話す時、発信と受信ではどちらが多いですか。
- II-04: あなたは、携帯電話/PHS で電子メール機能を使っていますか。
- II-05: あなたは、携帯電話/PHS を使う時、音声会話と電子メールのどちらの機能の方を使うことが多いですか。
- II-06: あなたは、携帯電話/PHS のチャット機能(リアルタイムでメールを送受信)を使うことがありますか。
- II-07: あなたは、授業中には携帯電話/PHS の電源を切りますか。
- II-08: あなたは、電車やバスの中では携帯電話/PHS の電源を切りますか。
- II-09: あなたは、病院の中では携帯電話/PHS の電源を切りますか。
- II-10: あなたは、図書館の中では携帯電話/PHS の電源を切りますか。
- II-11: あなたは、夜 9 時過ぎに自宅にいる人に携帯電話/PHS をかけること

- がありますか(音声通話)。
- II-12: あなたは、夜 9 時過ぎに自宅にいる人に携帯電話/PHS で電子メールを送ることがありますか。
- II-13: あなたが携帯電話/PHS で話す件で最も多いのはどのような件ですか。
- II-14: あなたは、携帯電話/PHS で話すようになって、友人や家族などのほかの人とのスケジュール調整が前よりも容易になったと思いますか。
- II-15: あなたは、携帯電話/PHS で話すようになって、いつでも誰かと話ができるという安心感が強くなったと思いますか。
- II-16: あなたは、携帯電話/PHS で話すようになってから、以前よりこまめに家族に連絡をとるようになったと思いますか。
- II-17: あなたは、携帯電話/PHS で話すようになってから、友人と以前よりこまめに連絡をとるようになったと思いますか。
- II-18: あなたは、サークル活動やアルバイトのための必要事項の連絡に携帯電話/PHS で話すことがありますか。
- II-19: あなたは、学業(授業、課題、レポート等)について連絡または情報交換をするために携帯電話/PHS で話すことがありますか。
- II-20: あなたは、携帯電話/PHS で話すようになってから、友人と「おしゃべり」を楽しむことが増えたと思いますか。
- II-21: あなたは、携帯電話/PHS で話すことの利点のひとつは、本人以外の人と話をしなければならないかもしれないという心配がなくなったことだと思いますか。
- II-22: あなたは、携帯電話/PHS で話す場合には自分の居場所が相手に知られないことが便利だと思ったことがありますか。
- II-23: あなたは、携帯電話/PHS で話すようになってから、他者が自分にいつでも連絡できるので束縛されているような気がすると思ったことがありますか。
- II-24: あなたは、携帯電話/PHS で話すようになってから、時間がより有効に使えるようになったと思いますか。

II-25：あなたは、携帯電話/PHS で話す予定もない時に、携帯電話または PHS を扱って遊ぶことがありますか。

II-26：あなたは、携帯電話/PHS を操作しながら歩くことがありますか。

携帯電話非使用者向けの項目（ただし、質問 I-01 には回答）

III-01：あなたが携帯電話または PHS を使っていない理由を書いて下さい。

III-02：あなたは、事情が許せば、携帯電話/PHS を使いたいと希望しますか。

III-03：あなたは、過去に携帯電話/PHS を使用した経験がありますか。

III-04：あなたは、現在、パソコンを用いた電子メールを使っていますか。

III-05：あなたは、過去に、パソコンを用いた電子メールを使った経験がありますか。

III-06：あなたは電話で話すことが好きですか。

III-07：あなたは、電話よりも直接相手に会って話す方が好きですか。

これらの項目に対する回答方式は、基本的には多肢選択法であったが、一部には2件法（はい、いいえ）も用いられていた。

調査実施時期：2002（平成14）年9月

手続き 調査は、正規の講義の最終回に192名の受講生を対象に無記名の任意調査として実施された。調査の目的は、大学生の携帯電話/PHS（以後、PHS だけに関連した内容の場合を例外として、両者をまとめて携帯電話と表記する）の利用実態を知ることであると教示され、任意調査であるので、協力の意思のある人だけが回答すればよいこと、回答が提出されない場合も何ら不利益はないことが説明された後に、質問紙が配布された。配布は、受講生が講義終了後、講義室を退室する際に封筒に入れられた質問紙を任意に持ち帰るという形式で行われた。質問紙に回答する意思のある人は、1週間後までに回答済みの質問紙を再度封筒に入れて所定の回収場所に持参し、提出するように求められた。また、配布当日の授業に欠席した受講生は少数であったが、彼らに対しては掲示によって調査の実施と協力の呼びかけが行われ、それに応じた人に対しては上記と同じ手続きで質問紙の回収が行われた。全体の回収率は81.8%であった。

結果と考察

回答者157名のうち、その回答が矛盾した内容で信頼性に乏しいという理由で1名が、さらに1名が年齢・性別などが未記入であったために除外されたので、155名が分析の対象とされた。この155名中2名については携帯電話を使用していなかったため、質問III-01～III-07に対する回答だけが求められた。残る153名（女性124名、男性29名）の携帯電話使用者については質問I-01～I-10および質問II-01～II-26に対する回答が分析された。なお、分析に際しては、無記入回答や複数回答は対象から除外されたので、分析データ数は質問項目によって異なっている。また、分析は χ^2 検定法によって行われているが、男性回答者の数が少ないので（29名）、クロス集計すると、回答選択肢の数によっては期待値が χ^2 検定法の要求する基準を満たさない可能性があるために、男女別に分析された。

携帯電話の使用状況 回答者のほとんど全員が携帯電話の使用者であり（155名中153名）、携帯電話の使用者の全員が携帯電話の所有者である（質問I-01、およびI-02）。また、質問I-03への回答によれば、無回答の11名を除く、142名中でPHSの所有者は2名だけであるので、実質的にはPHSは携帯電話のカテゴリからははずれたとよい状況にある。PHSは、1995年にサービスが開始されてからしばらくはその低料金や電力消費の少なさなどによってかなりの普及度を示し、とくに学生には携帯電話が普及しはじめてからも相当の期間人気があったが、現時点においてはその使用者は非常に減少している（ただし、総務省（2004）によれば、全国のPHS加入数は2004年6月末で約503万件あるので、携帯電話の約8270万件と比べるときわめて少ないが、まだかなり使われているとはいえる）。

このような変化の大きな理由のひとつは、携帯電話の料金値下げによってPHSと携帯電話の料金格差が小さくなったことであるが、それと同程度に重要な理由として携帯電話の利便性、とくにサービス範囲の広さとそれに関連した移動中の使用可能性をあげることができる。PHSは、携帯電話に比較して電波が弱いために多くの基地局が必要であることはよく知られた事実であるが、

そのために都会では通話可能範囲に大きな差はなくても、郊外や交通の幹線から離れた所ではその差は大きくなる。PHSが、データ通信の速さや低料金、充電間隔の長さなどの利点を持ちながら携帯電話に圧倒されたのは、この通話可能範囲の狭さのために「いつでも、どこでも」連絡ができるという特性において携帯電話に劣るためといえよう。逆にいうと、格差は縮小したとはいえ、依然として月当たりの料金において数千円の差があるにもかかわらず、携帯電話がこれほどの普及を見せたのは、他のどのような特徴よりも「いつでも、どこでも」連絡可能という条件を満たしていることによるといえよう。

質問 I-04 の回答（使用年数を自記）によると、携帯電話の使用者 153 名のうち、使用期間が 1 年半以下の回答者が 33 名（21.6%）、1 年半～2 年半が 43 名（28.1%）、2 年半～3 年半が 39 名（25.5%）、3 年半～4 年半が 21 名（13.7%）、4 年半以上が 17 名（11.1%）となっている。1 年以上 4 年半の範囲に 135 名（88.2%）が該当するので、回答者の年齢を考慮すると、高校入学以降に使い始め、比較的使い始めるのが遅い人でも大学入学の頃に使い始めると思われる。数人ではあったが 6 年、7 年という回答もあったので、中には中学時代から使い始める人もいるということを示している。なお、該当者の多い 3 年半以内の使用歴の人数は、女性が 78%で、男性が 66%となっており、女性が少し多くなっているが、全体の傾向には大きな差はない。

質問 I-05 は携帯電話の新規購入・機種交換による経験台数を尋ねたものであるが（現在の機種を含めた台数を自記）、1 台目が 32 名（女性 26 名、男性 6 名）、2 台目が 48 名（女性 41 名、男性 7 名）、3 台目が 37 名（女性 31 名、男性 6 名）、4 台目が 24 名（女性 18 名、男性 6 名）、5 台目以上 12 名（女性 8 名、男性 4 名）という結果が得られた。質問 I-04 の使用年数と関連づけてみると、ほぼ 1 年に 1 台ほどになるという結果が得られている。

質問 I-06 は、携帯電話の使用動機を 5 肢選択法で尋ねたものであるが、結果は表 1 に示されている。「ファッション」を理由としてあげる者が男女ともにいなかったため、4 カテゴリーの χ^2 検定を行ったところ、男女ともに同じ傾向を示し（女性の場合、 $\chi^2(3)=90.366$, $p<.01$; 男性の場合、 $\chi^2(3)=15.519$, $p<.01$), 「いつでも連絡可能」をあげる者が圧倒的に多く、次いで「みんながもっ

ているから」、「メールがしたい」の順であった。これは、少なくとも携帯電話の使用開始時には「いつでも、どこでも」連絡がとれるということが最も重視されていることを示している。また、「みんなが持っているから」が男女ともに 2 位であったのが、対人志向性を示すものとして興味深い。

表 1 携帯電話の使用開始動機（数字は人数）

	いつでも連絡可	皆がもっている	メールを使いたい	ファッション	その他	合計
女	75	24	18	0	6	123
男	15	7	3	0	2	27
合計	90	31	21	0	8	150

【注】規定外の複数回答が女性 1 名、男性 2 名あったので除外

表 2 携帯電話料金の負担者（数字は人数）

	自分	父親	母親	その他	合計
女	51	47	23	2	123
男	19	5	3	2	29
合計	70	52	26	4	152

【注】女性に規定外の複数回答が 1 名あったため除外

質問 I-07 は、携帯電話の料金負担者を表 2 に示されている 4 肢選択法で尋ねたものであるが、選択カテゴリ間に有意な差（女性 $\chi^2(3)=50.756$, $p<.01$; 男性 $\chi^2(3)=26.034$, $p<.01$ ）があった。「自分」が最も多く、次いで「父親」、「母親」の順になることは性別にかかわらず認められるが、女性の場合は「父親」が 38.2%で、「自分」の 41.5%とほぼ同じである点が男性とは異なっている。男性の場合は、「自分」が 65.5%で、「父親」は 17.2%に過ぎない。「父親は娘に甘い」ということばがあるが、それだけではなく、「いつでも、どこでも」お互いに連絡できることの必要性を息子の場合よりも強く感じてのことかもしれない。

質問 I-08 は、携帯電話料金が回答者の自由に使える金額に対して占める比率を % 表示で回答することを求めたものである。これは、携帯電話を使うことが各人に対してどの程度の重要性をもつかということの指標のひとつとしてとりあげたものであるが、結果は表 3 に示されている。回答は、表 3 に示されている 4 カテゴリーに分類された。全体的な傾向は男女ともに共通で、20%未満と 40%未満がほぼ同じ数字で、他の 2 カテゴリーと比較して有意に多い（女性 χ^2

(3)=52.415, $p<.01$; 男性 $\chi^2(3)=12.286$, $p<.01$)。自由に使える金額の 20%までが 40%弱, 20%~40%が 40%強という数字は評価の分かれるところであるが, 極端な金額ではないにしても, 少なくはない金額である。それだけ携帯を使用することの利点, あるいは必要性を感じていると考えてもよいのではないかと思われる。

表 3 携帯料金が自由に使える金額に占める比率 (数字は人数)

	0~19(%)	20~39(%)	40~59(%)	60~100(%)	合計
女	42	48	9	7	106
男	11	12	4	1	28
合計	53	60	13	8	134

【注】女性18名, 男性1名(合計19名)の無回答は除外

質問 I-09 は, 現在使用中の携帯電話の選択理由を「ブランド」, 「機種固有の機能」, 「スタイル」, 「何となく」, 「安かった」, 「その他」の 6 肢選択法で尋ねたものである。カテゴリ間の出現頻度の差は, 女性の場合には有意 ($\chi^2(5)=14.317$, $p<.05$) であるが, 男性の場合には有意ではなかった。女性の場合には「機種固有の機能」(23.6%), 「安価」(22.0%), 「ブランド」(19.5%) などが「スタイル」(16.3%), 「何となく」(10.6%), 「その他」(8.1%) よりも選択理由にあげられることが多かった。しかし, 男性の場合でも「安価」(31.0%), 「ブランド」(27.6%), 「機種固有の機能」(13.8%) が上位にあげられている点では共通しており, またその比率はむしろ男性の方が高いことから, 上位 3 つはその順位にこそ違いはあるが, 共通して選択基準になる可能性のあるものであるといえるかもしれない。男性の場合に有意な結果が得られなかったのは回答者数が少なかったためである可能性がある。

質問 I-10 は, 各自が携帯電話を所有することをどの程度必要と思っているかを「全く必要なし」, 「あまり必要なし」, 「まあ必要」, 「非常に必要」の 4 肢選択法で尋ねたものである。実際には, 「全く必要なし」は男女とも該当者なしであったので, 残りの 3 つの選択肢から選択した結果になった。男性の場合には有意な結果は得られていないが, これは「あまり必要なし」の該当者もなく, 「まあ必要」が 14 名, 「非常に必要」が 15 名と, 選択数に差がなかったた

めであり, 別の言い方をすると男性はすべて携帯電話の必要性についてはある程度以上認める者であったということである。それに対して女性は, カテゴリ間の選択数に有意な差があったが ($\chi^2(2)=54.500$, $p<.01$), これは「あまり必要なし」が 4 名と非常に少なく, 逆に「まあ必要」が 51 名, 「非常に必要」が 69 名と多かったため, この結果も, 統計的有意性の点を除くと, 男性の場合と同じく, 携帯電話の必要性を認識する回答が大部分であった。ただし, 女性は, 男性に比較して「非常に必要」と回答する者の比率が相対的に高かったことは注目に値する。

携帯電話の使用用途 大学生が携帯電話をどのような用途で用いているかを調べたのが質問 II-13, II-18, II-19 である。

質問 II-13 は, 「場所・時間の打ち合わせ」「帰宅連絡」「友人とおしゃべり」「アルバイトやサークルの連絡」「その他」の 5 つの選択肢の中から最も多く使う用件を選択することを求めるものであったが, 上記の順番で選択数を記述すると, 女性の場合が 121 名中(無回答・規定外回答が 3 名) 50 名, 10 名, 53 名, 6 名, 2 名であり, 男性の場合が, 26 名中(無回答・規定外回答が 3 名) 11 名, 2 名, 7 名, 3 名, 3 名であった。男女ともに「場所・時間の打ち合わせ」と「友人とおしゃべり」が他のカテゴリと比較してずっと多いという特徴を示している。カテゴリ間の出現頻度に関する χ^2 検定では男女ともに有意な水準に達している(女性 $\chi^2(4)=104.165$, $p<.01$; 男性 $\chi^2(4)=10.923$, $p<.05$)。

質問 II-18 は, アルバイトやサークル活動における連絡用途に携帯電話を用いることがあるかということについて, 「全く話さない」「めったに話さない」「時々話す」「しばしば話す」「いつも話す」の 5 肢選択法で回答を求めたものである。質問 II-13 においては, 5 つの用途に関する選択肢から最も多い用途の選択を求めたが, ここではアルバイトやサークル活動における連絡用途にどの程度頻繁に用いるかという視点から回答を求めた点が異なっている。女性は, 「全く話さない」(1 名) から順に 7 名, 35 名, 45 名, 35 名という結果であった(無回答 1 名を除外)。男性は, 「全く話さない」の選択者がいなかったが, 「めったに話さない」(1 名) から順に 4 名, 15 名, 9 名という結果であった。男女ともに χ^2 検定の結果は有意であり, 女性が $\chi^2(4)=60.943$, $p<.01$, 男性が

$\chi^2(3)=15.552$, $p<.01$ であった。この結果は、男女ともに「全く話さない」と「めったに話さない」が非常に少ないことの反映であると思われるが、逆にいうと、かなりの程度でこの連絡用途の使用が多いことを示しているが、それは女性の場合で65.0%, 男性で82.8%が「しばしば話す」または「いつも話す」のいずれかに該当することからもいえる。

質問II-19は、学業関連の連絡や情報交換のために携帯電話を使用する頻度に関して、質問II-18と同じ選択肢を用いて回答を求めたものである。女性の場合、「全く話さない」から順に124名中1名, 7名, 22名, 56名, 38名であり、男性の場合、同じ順番で、0名, 2名, 5名, 11名, 11名であった。 χ^2 検定の結果は、男女ともに有意であった(女性 $\chi^2(4)=82.210$, $p<.01$; 男性 $\chi^2(3)=8.379$, $p<.05$)。これらの結果は、基本的には質問II-18の結果と同様の傾向を示すものであり、かなりの程度でこの用途でも携帯電話が使用されることを示している。

常態化の影響 質問II-01, II-02, II-07, II-08, II-09, II-10, II-14, II-15, II-24, II-25, II-26は、中村(2001)の言う「常態化」の程度に関する質問である。いずれの項目も「常に電源を切っている」～「常に電源を入れている」の5肢選択法で回答を求めているが、質問II-01は在宅時の、質問II-02は外出時の携帯電話の常態化に関するものである。どちらの項目も5つの選択肢のうち、回答者があったのは、「ほとんど常に電源を入れている」と「常に電源を入れている」の2項目だけであり、しかも圧倒的に「常に電源を入れている」の項目が多かった。質問II-01の場合、「ほとんど常に電源を入れている」が19名(女性16名, 男性3名), 「常に電源を入れている」が134名(女性108名, 男性26名)であり、質問II-02の場合は、「ほとんど常に電源を入れている」が24名(女性19名, 男性5名), 「常に電源を入れている」が129名(女性105名, 男性24名)であった。女性の場合も男性の場合も共通して在宅時にも(女性 $\chi^2(1)=68.258$, $p<.01$; 男性 $\chi^2(1)=18.241$, $p<.01$)も外出時にも(女性 $\chi^2(1)=59.645$, $p<.01$; 男性 $\chi^2(1)=12.448$, $p<.01$)有意に「常に電源を入れている」人が多いことが示されている。まさに携帯電話は、必要な時に電源を入れるものではなく、常に待ち受け態勢にあるのが当然の常態化した道具

として使われているといえよう。

質問II-07, II-08, II-09, II-10は、常態性に関連した項目であるとともに、マナーにも関連した項目であり、その意味で対人関係における規範意識を窺い知ることができるものである。

表4 授業中の携帯電話の電源状態(数字は人数)

	全く切らない	めったに切らない	時々切る	ほとんど切る	いつも切る	合計
女	53	51	17	1	2	124
男	13	7	7	1	1	29
合計	66	58	24	2	3	153

表5 病院内における携帯電話の電源状態(数字は人数)

	全く切らない	めったに切らない	時々切る	ほとんど切る	いつも切る	合計
女	10	16	25	24	49	124
男	2	4	4	6	13	29
合計	12	20	29	30	62	153

これらの項目の結果は興味深い対比を示している。質問II-07(授業中), II-08(交通機関), II-10(図書館)における電源管理のパターンは相互に非常に類似しており、「全く電源を切らない」と「めったに電源を切らない」が圧倒的に多いのに対して、質問II-09(病院)では逆に「いつも電源を切る」と「ほとんどいつも電源を切る」が非常に多いという結果になっている。表4は質問II-07の結果を示しており、表5は質問II-09の結果を示している。この対比は、病院内という、携帯電話の使用が時には生命にもかかわるとされる場所では特例的に携帯電話の電源を切るが、それ以外の場所ではマナー上、あるいは規則上電源を切ることが求められる場所であるにもかかわらず電源を切ることが非常に少ないことを意味しており、中村(2001)が言うほどには携帯電話のマナー行動が浸透しているとはいえない。同時に、このことは別の言い方をすれば、携帯電話がそれほど常態化したコミュニケーション・ツールになっていることを示しているともいえよう。なお、質問II-08では、「全く切らない」が女性52名, 男性13名, 「めったに切らない」が女性53名, 男性9名, 「時々切る」が女性14名, 男性7名, 「ほとんど切る」と「いつも切る」を合計したものが女性5名で男性はいないという結果であった(女性 $\chi^2(4)=106.887$, $p<.01$; 男性 $\chi^2(2)=1.931$, n.s.)。また、質問II-10では、「全く切ら

ない」が女性 57 名, 男性 12 名, 「めったに切らない」が女性 48 名, 男性 10 名, 「時々切る」が女性 13 名, 男性 4 名で, 「ほとんど切る」と「常に切る」の合計が女性で 6 名, 男性で 3 名であった (女性 $\chi^2(4)=107.452$, $p<.01$; 男性 $\chi^2(4)=16.690$, $p<.01$)。

質問 II-14 は, 常態化の行動面での影響を示すものであるが, 女性の場合 124 名中 122 名 ($\chi^2(1)=116.129$, $p<.01$), 男性の場合 29 名全員が以前よりもスケジュール調整が容易になったと答えている。

質問 II-15 は, 常態化の意識面での影響を扱ったものであるが, 結果は表 6 に示されている。男女ともにカテゴリ間の頻度差は有意 (女性 $\chi^2(4)=29.387$, $p<.01$; 男性 $\chi^2(4)=11.517$, $p<.05$) だが, 傾向は異なっており, 女性の場合には「やや思う」が他のカテゴリに比較して多いことと「全く思わない」が非常に少ないことを特徴としているのに対して, 男性の場合には「どちらともいえない」が最多で 13 名で, 他の 4 カテゴリはいずれもほぼ同じ水準で少ないという特徴をもっている。女性の場合にも安心感への影響は予想されるほど大きくないが, 男性の場合にはさらに影響は小さいといえる。

表 6 携帯電話の安心感への影響 (数字は人数)

	全く思 わない	あまり思 わな い	どちらとも 言え ない	やや思 う	非常に思 う	合計
女	5	24	25	43	27	124
男	4	4	13	3	5	29
合計	9	28	38	46	32	153

質問 II-24 は, 常態化と時間の有効利用に関する質問であるが, 回答は, 「全く思わない」～「非常に思う」の 5 肢選択法で行われた。女性の場合, カテゴリ間の頻度差は有意 ($\chi^2(4)=54.033$, $p<.01$) であったが, これは「全く思わない」「非常に思う」という両極端の回答がそれぞれ 123 名中 5 名と 9 名と非常に少なく, 反対に中間の「あまり思わない」が 24 名, 「どちらともいえない」が 37 名, 「やや思う」が 48 名と多かったためと思われる。男性の場合には, 「全く思わない」が 29 名中 2 名, 「あまり思わない」が 4 名, 「どちらともいえない」が 10 名, 「やや思う」が 8 名, 「非常に思う」5 名であったが, カテゴリ間の差は有意ではなかった ($\chi^2(4)=7.034$, n.s.)。この結果は, 携帯

電話をもつようになって, それによって特に時間の有効利用ができるとは思われていないことを意味している。

質問 II-25 は, とくに携帯電話を使う必要もない時にそれを用いて遊ぶ傾向という, 常態化の結果としての行動の習慣化に関する質問であるが, 「全くない」「めったにない」「時々ある」「しばしばある」「いつもある」の 5 肢選択法で回答が求められた。女性の場合には, 「全くない」から「いつもある」までの各選択肢を選択した人数は, 順番に 124 名中 6 名, 18 名, 41 名, 39 名, 20 名であった。男性の場合には, 同じ順番で示すと, 29 名中 2 名, 4 名, 10 名, 9 名, 4 名であった。カテゴリ間の差は女性だけが有意であった (女性 $\chi^2(4)=35.758$, $p<.01$; 男性 $\chi^2(4)=8.414$, n.s.)。この結果は, 女性の場合, 「時々ある」が 33.1%, 「しばしばある」が 31.5%で, 両者を合計すると 64.6%に達するためであり, これに「いつもある」(16.1%)を足すと, 何らかの程度で携帯電話を使って遊ぶ人の比率は 80.7%に達する。携帯電話の常態化がそれを非常に身近なものにした結果, それを扱うことが習慣化したといえよう。

質問 II-26 もまた行動の習慣化に関するものである。回答は, 質問 II-25 と同じ選択肢を用いて 5 肢選択法で求められた。女性の場合, 「全くない」から「いつもある」までを順に記述すると, 124 名中 1 名, 10 名, 34 名, 60 名, 19 名であり, カテゴリ間の出現頻度の差は有意であった ($\chi^2(4)=86.403$, $p<.01$)。男性の場合, 同じ順番で記述すると, 29 名中 1 名, 3 名, 11 名, 9 名, 5 名であり, カテゴリ間の差は有意であった ($\chi^2(4)=11.862$, $p<.05$)。女性の場合, 「しばしばある」「いつもある」の 2 カテゴリで 63.7%に達し, これに「時々ある」の 27.4%を加えると, 何らかの程度で歩行中に携帯電話を操作する人は 91.1%に達する。つまり, ほとんどの人が歩行中に携帯電話を操作するということであり, 常態化に伴う行動の習慣化の傾向は強いといえよう。男性の場合も何らかの程度で歩行中に携帯電話を操作する人は, 86.2%に達している。ただ, 女性では最も人数が多いのが「しばしばある」の 48.4%であり, 「時々ある」の 27.4%よりもかなり多いのに対して, 男性の場合は最多の「時々ある」(37.9%)とその次に多い「しばしばある」(31.0%)の差は小さい。この意味で女性の方が歩行中の携帯電話操作の頻度は相対的に多いといえよう。

音声機能とメール機能 携帯電話の音声機能の使用にあたって、発信・受信のいずれが多いかを尋ねたものが質問Ⅱ-03である。「圧倒的に発信が多い」「やや発信が多い」「同程度」「やや受信が多い」「圧倒的に受信が多い」の5選択肢からの選択を求めたが、男女ともに「同程度」が最も多く（女性57名、男性15名）、次いで「やや受信」（女性38名、男性7名）、「圧倒的に受信」（女性16名、男性5名）となり、女性は124名中13名が発信が多いと答え、男性は29名中2名が発信が多いと回答したので、ほぼ発信と受信のバランスをとって使っているが、いくらか受信が多い方に偏っているという状態である（女性 $\chi^2(4)=79.952$, $p<.01$ ；男性 $\chi^2(3)=12.793$, $p<.01$ ）。

質問Ⅱ-04は、電子メール機能の利用の頻度について、「全く使わない」「まれに使う」「時々使う」「いつも使う」の4選択肢から選択する方法で回答を求めたが、女性の場合には「まったく使わない」「まれに使う」の該当者がなく、「時々使う」6名、「いつも使う」118名でカテゴリ間の違いは有意（ $\chi^2(1)=101.161$, $p<.01$ ）であり、男性の場合には「全く使わない」が1名あったものの、「まれに使う」0名、「時々使う」7名、「いつも使う」21名でカテゴリ間の差は有意であった（ $\chi^2(2)=21.793$, $p<.01$ ）。したがって、男女ともに、メール機能はきわめて基本的な機能として使用されているといえる。

表7 携帯電話の音声会話機能とメール機能の相対的利用頻度（数字は人数）

	圧倒的に 音声	やや音声	ややメー 同じくらい	圧倒的に メール	合計
女	0	5	17	38	124
男	3	3	6	8	29
合計	3	8	23	46	153

質問Ⅱ-05は、携帯電話の2大基本機能である音声会話機能とメール機能の相対的利用頻度を尋ねたものであるが、結果は表7に示されている。カテゴリ間の差は、女性では有意である（ $\chi^2(3)=64.839$, $p<.01$ ）が、男性の場合には有意ではなかった（ $\chi^2(4)=5.310$, n.s.）。この結果は、女性の場合のメール利用頻度が大きいのに、男性の場合は音声会話機能とメール機能の利用の間に相対的には大きな差がないことを意味している。つまり、相対的にはあるが、メール機能は女性によってより多く使われているといえよう。

質問Ⅱ-06は、メール機能をリアルタイムに用いる利用法について尋ねたものである。回答は、「全く使わない」「まれに使う」「時々使う」「いつも使う」の4選択肢から選択を求めるものであったが、女性の場合、「全く使わない」が圧倒的に多く（122名中85名）、次いで「時々使う」「いつも使う」がどちらも14名、「まれに使う」が9名であった。このカテゴリ間の差は有意であった（ $\chi^2(3)=130.393$, $p<.01$ ）。一方、男性の場合もほぼ同様の傾向を示し、「全く使わない」が29名中15名で最も多く、「時々使う」6名、「いつも使う」5名、「稀に使う」3名という結果であり、カテゴリ間の差は有意であった（ $\chi^2(3)=11.690$, $p<.01$ ）。質問Ⅱ-04、Ⅱ-05の結果と関連させると、メール機能の利点は、音声会話機能と異なり、ただちに相手と直接的な会話をしなくても用は足りるということにあることを十分に意識した使い方をしていると思われる。

表8 深夜の音声通話利用（数字は人数）

	全くかけな い	めったに かけない	ほとんどいつも 時々かける	いつもかける	合計
女	1	26	57	20	124
男	2	2	22	0	29
合計	3	28	79	20	153

表9 深夜のメール機能の利用（数字は人数）

	全く送らな い	めったに 送らない	ほとんどい つも送る	いつも送る	合計
女	3	5	20	37	124
男	1	1	11	5	29
合計	4	6	31	42	153

直接性の影響 携帯電話の大きな特徴のひとつは、固定電話と異なり、個人用の電話であることから直接特定の個人を期待して利用できることである。この携帯電話の直接性と関連した質問が、Ⅱ-11、Ⅱ-12、Ⅱ-21、Ⅱ-22である。質問Ⅱ-11とⅡ-12はいずれも深夜の連絡に関するもので、携帯電話の普及以前であればマナーとして慎むべきこととされていたことである。それが、携帯電話の普及とその直接性によって許容されるようになりつつあると言われているが、実際にそうであるのかをこれらの項目によって検討することが目的である。質問Ⅱ-11の結果は表8に、質問Ⅱ-12の結果は表9に示されている。質問Ⅱ-

11については、男女ともにカテゴリ間の差は有意（女性 $\chi^2(4)=66.565$, $p<.01$ ；男性 $\chi^2(3)=40.103$, $p<.01$ ）であり、ともに最も多いのは「時々かける」（女性46.0%, 男性75.9%）であった。しかし、女性の場合、「ほとんどいつもかける」と「いつもかける」を合計すると40名（32.3%）になるのに対して、男性の場合は、両者を合計すると3名（10.3%）であるので、女性は男性よりも相対的に頻繁に深夜の電話をする傾向があるといえる。一方、質問II-12は、音声会話に比較して深夜利用しやすいと思われるメール利用に関する質問であるが、男女ともにカテゴリ間の差は有意であった（女性 $\chi^2(4)=89.065$, $p<.01$ ；男性 $\chi^2(4)=17.379$, $p<.01$ ）。ただし、II-12の回答は、II-11の回答とは異なった傾向を示している。女性の場合、「いつも送る」が最多カテゴリで124名中59名（47.6%）、次いで「ほとんどいつも送る」が37名（29.8%）、「時々送る」20名（16.1%）であった。男性は、「いつも送る」と「時々送る」が同数で11名（37.9%）、「ほとんどいつも送る」が5名（17.2%）であった。男女ともに深夜利用の頻度は質問II-11の場合より多いが、特に女性の場合には、上位2カテゴリを合計すると77.4%（男性は55.1%）になるので、深夜利用の頻度は高いといえる。直接的に特定の相手にのみつながり、かつメールの特徴として相手に即時の反応を要求しないことから深夜利用に躊躇を感じないで済むことがこの理由である可能性は高いであろう。

質問II-21は、この直接性の意識への影響をより端的に尋ねたものであるが、女性の場合にはカテゴリ間の差は有意（ $\chi^2(4)=21.919$, $p<.01$ ）であるが、男性の場合には有意ではなかった（ $\chi^2(4)=3.241$, n.s.）。回答は、「全く思わない」「あまり思わない」「どちらとも言えない」「やや思う」「非常に思う」の5つの選択肢から選択する方式で得られたが、女性では「やや思う」が最多で123名中44名（35.8%）、次いで「非常に思う」が24名（19.5%）、「あまり思わない」22名（17.9%）の順であった。質問への肯定的回答は、合計で68名（55.3%）であるので、否定的回答の合計が35名（28.5%）であることを考慮すると、女性は携帯電話のもつ直接性の特徴を利点として考える傾向が強いといえよう。それに対して、男性は肯定的意見と否定的意見が近接しており、意見が分かれることを示している。

質問II-22は、携帯電話の直接性に基づく「居場所不明感覚」を問うもので、橋元ら（2000）に報告されている調査でも4割強の人が居場所が知られないことが便利なこともあると回答している。この質問に関しては、「全く思わない」「めったに思わない」「時々思う」「しばしば思う」「いつも思う」の5肢選択法で回答を求めたが、女性の場合が「全く思わない」から順に124名中30名、38名、36名、18名、2名という結果になり、男性の場合は、同じ順序で29名中7名、8名、8名、5名、1名となった。 χ^2 検定の結果は、女性の場合には有意な水準に達したが（ $\chi^2(4)=36.000$, $p<.01$ ）、男性の場合には達しなかった（ $\chi^2(4)=6.00$, n.s.）。女性の場合には、「しばしば思う」（14.5%）、「いつも思う」（1.6%）が他の3カテゴリよりも少なかったためと思われる。しかし、「時々思う」（29.0%）と合わせて、何らかの肯定的反応という視点から見ると45.1%の女性が肯定的反応を示しているわけであり、この結果は橋元ら（2000）と類似した結果ともいえる。ただ、逆に見ると、55%の女性は否定的な見解を示しているわけであり、視点により評価のわかれる結果であるといえよう。一方、男性の場合は、肯定的な反応が3カテゴリで48.3%、否定的な反応が2カテゴリで51.7%であるので、有意な水準には達しなかったものの、やはり同様な傾向を示したといえよう。

対人関係性への影響 質問II-16、II-17、II-20、II-23は、携帯電話の使用が何らかの形で対人関係性や対人関係行動に及ぼす影響を検討するためのものである。

表10 家族との連絡の緊密化（数字は人数）

	全く思 わない	あまり思 わない	どちらとも 言えない	やや思う	非常に思う	合計
女	8	18	15	55	28	124
男	3	4	5	14	3	29
合計	11	22	20	69	31	153

質問II-16は、家族との連絡の頻度の増加という形で対人的関係の緊密性への影響を検討し、質問II-17は同じ視点から友人との対人関係への影響を見るためのものである。結果は、それぞれ表10、表11に示されている。質問II-16に関する χ^2 検定の結果は、男女ともに有意な水準に達していたが（女性 χ^2

(4)=54.306, $p < .01$, 男性 $\chi^2(4)=14.966$, $p < .01$), 質問Ⅱ-17 に関する χ^2 検定の結果も同様に男女ともに有意な水準に達していた (女性 $\chi^2(4)=95.516$, $p < .01$; 男性 $\chi^2(4)=14.276$, $p < .01$)。質問Ⅱ-16, Ⅱ-17 双方が肯定的な反応が多いことで共通しているが, 女性の場合, 質問Ⅱ-16 とⅡ-17 の「やや思う」の人数がほぼ同じであるのに対して, 「非常に思う」と反応した人数が質問Ⅱ-16 よりⅡ-17の方が21名多く, その反面「あまり思わない」という反応が10名少ないという結果が得られている。一方, 男性の場合は, Ⅱ-16 とⅡ-17 を比較すると, 「どちらとも言えない」がⅡ-17の方が多くなっているという点が異なっている。しかし, いずれにしても, 携帯電話の使用によって家族や友人との接触が増加していると感じていることは明らかであり, とくに友人に対する女性の対人関係緊密性の向上に寄与しているように思われる。

表 11 友人との連絡の緊密化 (数字は人数)

	全く思 わない	あまり思 わない	どちらとも 言えない	やや思う	非常に思 う	合計
女	1	8	13	53	49	124
男	1	1	8	8	11	29
合計	2	9	21	61	60	153

質問Ⅱ-20 は, 携帯電話の使用の結果として, 友人関係の維持・発展行動としての「おしゃべり」が以前よりも増えたかを「全く思わない」「あまり思わない」「どちらとも言えない」「やや思う」「非常に思う」の5肢選択法で回答を求めたものである。 χ^2 検定の結果は, 男女ともに有意な水準に達している (女性 $\chi^2(4)=31.968$, $p < .01$; 男性 $\chi^2(4)=14.276$, $p < .01$)。女性の場合は, 「やや思う」(33.1%) が最も多く, 次いで「どちらとも言えない」(28.2%), 「非常に思う」(19.4%) の順になっている。肯定的な反応が52.5%であるが, 否定的な反応も「あまり思わない」(15.3%), 「全く思わない」(4.0%) を合計すると20%弱に達している。一方, 男性の場合には, 「やや思う」(10.3%), 「非常に思う」(13.8%) であり, 肯定的な反応が24.1%に達しているが, 「あまり思わない」(31.0%), 「全く思わない」(3.4%) よりも少なくなっている。また, 最も多いのは, 「どちらとも言えない」であり, これが41.4%である。両者を総合すると, 携帯電話の使用に伴う「おしゃべり」の頻度は, 女性の方が男性より

も相対的には増加したと認知する傾向が大きいといえるが, 全体的にはあまり強い傾向とはいえない。

表 12 携帯電話使用に伴う束縛感 (数字は人数)

	全く思 わない	めったに 思わない	時々思 う	しばしば 思う	いつも思 う	合計
女	27	51	28	16	2	124
男	10	8	5	6	0	29
合計	37	59	33	22	2	153

質問Ⅱ-23 は, 携帯電話使用に伴う束縛感について尋ねたものであるが, 結果は表 12 に示されている。カテゴリ間の出現頻度に関する χ^2 検定は, 女性では有意であるが ($\chi^2(4)=52.371$, $p < .01$), 男性は有意な水準に達しなかった ($\chi^2(3)=2.034$, n.s.)。女性の場合, 束縛感を感じる人が3カテゴリで46名(37.1%)で, 束縛感を感じない人(「全く思わない」, 「めったに思わない」)が78名(62.9%)であるので, 束縛感を感じない人の方が大幅に多いということを示している。男性の場合は, 最多のカテゴリが「全く思わない」(34.5%)であるが(女性の場合は, 「めったに思わない」が41.1%で最多), その他のカテゴリとの差が大きいことが特徴である。男性の場合も62.1%が束縛感を全く感じないか, めったに感じないと答えているので, 携帯電話の使用によって束縛感を感じない人の方が多いということが明らかにされた。これは, 「いつでも, どこでも」という携帯電話の利便性をより積極的に評価し, 「いつでも, どこでも」連絡ができることによる自由の獲得という見方が多いためと思われる。中村(2001)は, 「影響の両義性」ということばで携帯電話の影響のひとつの側面を表現しているが, 人や状況によって正反対の影響が生じるという意味で用いられる, このことばの意味からすると, 今回の回答者たちは「自由」と「束縛感」のうち, より積極的に「自由」の側面を認めたものと考えられる。**質問Ⅲ-01~Ⅲ07について** 今回の回答者のうち, 携帯電話の使用者でない者はわずか2名であったので, 分析を行うには対象者が少なすぎるために, 質問Ⅲ-01~Ⅲ07の回答に関する分析は行わない。

引用文献

- 橋元良明・石井健一・中村功・是永諭・辻大介・森康俊 2000 携帯電話を中心とする通信メディア利用に関する調査研究 東京大学社会情報研究所紀要, **14**, 83-192.
- 五十嵐祐・吉田俊和 2003 大学新入生の携帯メール利用が入学後の孤独感に与える影響 心理学研究, **74**, 379-385.
- 松田美佐 1999 変容する移動体メディアとその可能性(研究ノート) 東京大学社会情報研究所情報メディア研究資料センターニュース第11号(1999年3月)
- 中村 功 2001 携帯電話と変容するネットワーク 川上義郎(編) 情報行動の社会心理学(シリーズ21世紀の社会心理学5) 北大路書房 第7章, Pp.76-87.
- 中村彰宏・吉田誠 2001 移動体通信の普及動向 郵政研究所月報 2001.9.
- 総務省 2004 移動電気通信事業加入数の現況 総務省総合通信基盤局ホームページ